

中学生の「暴力」と「不適応」

——日本, 西ドイツ, タイ, インドネシアの比較研究——

川 上 保 之

抄録 中学校生徒の「暴力」と「不適応」について、質問紙法による調査を4カ国（日本・西ドイツ・タイ・インドネシア）の5都市（横浜・弘前・ハノーバー・バンコク・メダン）7群の総計641名に実施した。結果を統計学的に分析し、比較文化的問題について考察し検討をくわえた。

日本国内間の比較では、有意な差はみられなかった。しかし国の異なる3つの大都市の群間では、大きな違いが認められた。また宗教的背景の異なる同一地域内の3群間では、有意な差と構造的な違いが認められた。

これらのことから、中学校生徒の「問題行動準備性」形成には、世界共通と考えられてきた「現代化」や「都市化」による影響よりも、それぞれの社会文化や宗教的背景の違いがより多く影響するものと考えられた。

弘前医学 40:392-403, 1988

Key words : junior high school student maladjustment
cross-cultural study religion
violence

CROSS-CULTURAL STUDY ON VIOLENCE AND MALADJUSTMENT IN JUNIOR HIGH SCHOOL STUDENTS

YASUYUKI KAWAKAMI

Abstract A cross-cultural study on violence and maladjustment among junior high school students was attempted in Japan, West-Germany, Thailand, and Indonesia. The subjects were divided into seven groups by nations, areas, and religions. This study was performed, using a newly designed questionnaire, which was composed of 10 items, referring to violence used by students and their feelings of maladjustment in school and social life.

The replies were analyzed statistically. The results revealed were as follows: 1) Difference between two areas in Japan was statistically not significant. 2) There were large differences between three cities in different countries. 3) There were some differences between three schools with different religious back-ground in a city of Indonesia.

It was pointed out that violence and maladjustment among junior high school students are rather more influenced by their back-ground culture and religious back-grounds than by so-called modernization and urbanization.

Hirosaki Med. J. 40:392-403, 1988

弘前大学医学部神経精神医学教室(主任 福島 裕
教授)

昭和63年5月26日受付

Department of Neuropsychiatry, Hirosaki University School of Medicine (Director: Prof. Y. FUKUSHIMA), Hirosaki, Japan

Received for publication, May 26, 1988

1. はじめに

年々増大し、また低年齢化傾向を示している青少年の問題行動については、その現象面について先進諸国間における類似性が指摘されている¹⁻³⁾。しかし一方では、「家庭内暴力」のように、その発現にいたる機序に、わが国独特の社会的背景や家族病理が関与しているとされるものも少なくない^{4,5)}。いずれにせよ、青少年問題は彼らの生きる時代や社会、文化の影響を強く反映するものと思われる。そこで著者は、社会文化的に異なる集団のなかで問題行動の現われ方がどのように相異なるのかを比較検討し、あわせて宗教的環境の問題をも加えて考察する。

従来、このような研究においては、「問題行動」は事例化したものについて集計した資料、統計によって比較検討されることが多かった^{6,7)}。しかし、今回の調査では「問題行動準備性」に着目し、一般の中学生における「暴力」と「不適応」の問題について質問紙法による

調査を実施し、その結果の分析を試みたので報告する。

2. 対象と方法

対象は表1に示したように4カ国、5地点7群の総計641名の中学校生徒である。調査地点として、日本では横浜市と弘前市、西ドイツではハノーバー市、タイではバンコク市、インドネシアではメダン市が選ばれた。

その平均年齢は13.5±0.6歳、同胞数は平均2.8±0.9となった。同胞数は日本、西ドイツで少なく、東南アジアの二国で多い。父親の職業では、横浜で専門職が多く、バンコクで自営・商業が多い。インドネシアでも宗教校ごとの違いが認められた。

また母親については、全体として有職婦人が多く、対象年齢の生徒をもつ母親では、ほぼ2人に1人は「共稼ぎ」であると考えられた。なお、父母のうち一方、または両方を欠くものは各群で1.0%—7.4%にみられたが、有意差はなかった。

表1 生徒数と父母の職業

	(日 本)	(西ドイツ)	(タ イ)	(インドネシア・メダン)			合計	
	横 浜	弘 前	ハノーバー	バンコク	回教校	キリスト教校	仏教校	
総 数	111	100	74	77	96	74	109	641
男子	66	55	34	41	46	40	45	327
女子	45	45	40	36	50	34	64	314
平均年齢(歳)	13.7±0.3	13.5±0.2	13.4±0.9	13.5±0.8	13.2±0.7	13.5±0.5	13.4±0.4	13.5±0.6
同胞数	1.8±0.5	2.1±0.3	1.6±0.5	3.8±0.8	3.5±0.8	2.9±0.6	4.2±1.3	2.8±0.9
ブルーカラー	10	32	12	23	17	15	38	147
(%)	(9.0)	(32.0)	(16.2)	(29.8)	(17.7)	(20.3)	(34.9)	(22.9)
ホワイトカラー	63	35	4	10	47	40	15	214
(%)	(56.9)	(35.0)	(5.4)	(13.0)	(49.0)	(54.1)	(13.8)	(33.4)
自営・商業	29	9	15	39	10	5	38	145
(%)	(25.9)	(9.0)	(20.3)	(50.6)	(10.4)	(6.8)	(34.9)	(22.6)
専門職	3	3	20	2	17	10	1	56
(%)	(2.7)	(3.0)	(27.0)	(2.6)	(17.7)	(13.5)	(0.9)	(8.7)
その他	0	8	7	1	4	2	3	25
(%)	(0.0)	(8.0)	(9.5)	(1.3)	(4.2)	(2.7)	(2.8)	(3.9)
無回答	6	13	16	2	1	2	14	54
(%)	(5.4)	(13.0)	(21.6)	(2.6)	(1.0)	(2.7)	(12.8)	(8.4)
有職婦人	51	43	33	53	25	19	48	272
(%)	(45.2)	(43.0)	(44.6)	(68.8)	(26.0)	(25.7)	(44.0)	(42.4)
主婦	60	43	41	20	69	54	57	344
(%)	(54.8)	(43.0)	(55.4)	(30.0)	(71.9)	(73.0)	(52.3)	(53.7)
無回答	0	14	0	4	2	1	4	25
(%)	(0.0)	(14.0)	(0.0)	(1.2)	(2.1)	(1.3)	(3.7)	(3.9)

表 2 質問項目とその意味

1. とても腹が立ったときに、お母さんをたたいたりしますか。	①母への暴力
2. とても腹が立ったときに、お父さんをたたいたりしますか。	②父への暴力
3. とても腹が立ったときに、同胞をたたいたりしますか。	③同胞への暴力
4. とても腹が立ったときに、他人をたたいたりしますか。	④他人への暴力
5. とても腹が立ったときに、先生に暴力をふるったりしますか。	⑤先生への暴力
6. 学校生活に意味がないと思うことがありますか。	⑥学校無力感
7. 学校に行きたくないと思うことがありますか。	⑦不登校準備性
8. こんな社会に生きていても仕方がないと思うことがありますか。	⑧社会不適応感
9. これまでに自殺しようと考えたことがありますか。	⑨自殺念慮
10. これまでに家出をしたことがありますか。	⑩家出遂行

実際の調査は昭和59年10月から昭和62年6月までの間に三段階にわけて実施された。

1) 横浜および弘前での調査；国内での「暴力」と「不適応」の実態について、大都市と地方都市での様相の相異をも含めて知る目的で実施した。

2) ハノーバーおよびバンコクでの調査；大都市における社会文化的な背景の違いによる実態を観察するため、横浜と同様、人口が集中し、商工業の盛んな二都市での調査を追加した。

3) インドネシア・メダンでの調査；前調査でその影響が示唆された「社会文化ならびに宗教的背景の問題」を観察するため、インドネシア・メダン市内の回教校、キリスト教校、仏教校において更に調査を追加した。

調査は質問紙法による。質問項目は「問題行動準備性」を具体的に問うものとし、1つは「外罰的行動化」、もう1つは「内向的深刻化」を指標にし、新たに作成した。質問項目数は表2のように、暴力に関するものが5問(①—⑤)、不適応に関するものが5問(⑥—⑩)の合計10である。これは児童、生徒を対象とした調査では、回答の精度を高めるため質問数を最小限にしたほうがよい、という安藤⁸⁾の指摘を考慮した結果である。また質問内容については日本語から現地語に直接翻訳したが、その際、日本語を十分理解する現地母国語者と現地において協議をし、意味内容が変更されないよう配慮した。

回答は「はい」「ときどき」「いいえ」から1つを選択(⑨、⑩問については「はい」「い

いえ」のみ)させた。また調査は無記名で実施した。

こうして順序尺度でえられたデータは数量化に際して、「はい」を2点、「ときどき」を1点、「いいえ」を0点としてスコア化した。これらを、2群間の比較によるt検定をおこない、有意差について検討した。3群間以上の比較には、主成分分析により変量間の関係について検討した。さらにその結果を用いて、3群間比較には判別分析による検討を加えて考察した。

3. 結 果

(A) 各対象群間の比較

結果は、表3および図1に示した。表3は7群の回答を一覧表にし、その平均値および標準偏差の値、t検定の結果を示したものである。図1には3段階のそれぞれでのスコアの比較をグラフにした。横軸が質問番号であり、縦軸が各群の平均スコアをあらわしている。

1) 横浜および弘前の比較(表3、図1上) 両群ともに「暴力」に関する項目では、〈③同胞への暴力〉が高く、〈①②父母への暴力〉および〈⑤先生への暴力〉は低い。暴力全般のパターンは類似している。どの項目も横浜のほうが若干高いが、両群間で統計学的有意差は認められなかった。

「不適応」に関する項目では、両群で〈⑥学校無力感〉や〈⑦不登校準備性〉および〈⑧社会不適応感〉が高いが、〈⑨自殺念慮〉および〈⑩家出遂行〉は相対的に低い。

2) 横浜・ハノーバー(西ドイツ)・バンコク(タイ)の比較(表3, 図1中)

国内2群間比較とは異なり, 項目全般で, グラフの重なりは少ない。とくに「不適応」の項目でその傾向が大きい。統計学的に次の項目で有意差がみられた。すなわち, 横浜では他と較べて, <①②父母への暴力>が高く, また<⑥学校無力感>も高い。しかし, <④他人への暴力>は低かった。ハノーバーでは<④他人への暴力>が高く, また<⑧社会不適応感>が高い。しかし<⑨自殺念慮>については低かった。バンコクでは, <③④同胞や他人への暴力>は高いが, <①②⑤父母や先生への暴力>は低かった。また「不適応」の項目でも, <⑨自殺念慮>を除いて低かった。

3) メダン(インドネシア)の回教校・キリスト教校・仏教校の3群間の比較(表3, 図1下)

全体として, 上述の各群に比べて, 2, 3の項目を除いてはスコアが低かった。3群の有意差の検定では, 「暴力」の項目では, <①②③父母や同胞への暴力>において仏教校が有意に高く, また<④他人への暴力>ではキリスト教校が有意に高く, <⑤先生への暴力>においては回教校が有意に低かった。とくに回教校では<①②⑤父母および先生への暴力>はほとんど見られなかった。キリスト教校においても<①②父母への暴力>は皆無であった。

「不適応」の項目では, <⑧社会不適応感>で回教校が有意に低く, <⑨自殺念慮>について, スコアの低い順に, キリスト教校, 回教校, 仏教校と有意差を示して並んだのは興味深い。また「不適応」全般で回教校のスコアが低かったことが目についた。

(B) 主成分分析の結果

全集団について, 質問項目である10の因子について主成分分析を行ったが, この結果を図2に示した。第1主成分は寄与率26.61, 第2主成分は寄与率13.73, 第3成分は寄与率12.19, 第4主成分は寄与率11.31であり, 累

積寄与率は63.84%となったので, 解釈は第4主成分までとした。因子負荷量0.500以上を有意と考え, 各主成分を検討すると, 第1主成分は「権威への反発と内向化」, 第2主成分は「逃避的自己否定傾向」, 第3主成分は「不適応と行動化」, そして第4主成分は「権威以外への暴力傾向」を表すものと解釈された。つまり, これらの要素がこの順序で質問の構造に強く関与しているものと考えられる。

さらに, 第1及び第2主因子を座標とした二次元プロットでは, ①②⑤と③④, さらに⑥⑦⑧と⑨⑩という4つのクラスターが認められ, それぞれ, 「権威への暴力」「権威以外への暴力」「不適応感」「行動化傾向」をあらわすものと解釈された。

なお横浜・ハノーバー・バンコクおよび回教校・キリスト教校・仏教校のそれぞれの3群間比較についておこなった主成分分析の結果については, 第4主成分までを表4にあらわした。

(C) 判別分析の結果

集団全体の主成分分析から, 4つのクラスターに分類された10の項目のうち, それぞれのクラスターを代表すると思われる②③⑧⑨(「暴力」の項目から2つ, 「不適応」の項目から2つ)を選択して, 横浜・ハノーバー・バンコクの比較, および回教校・キリスト教校・仏教校の比較について判別分析を行い, 判別関数を求めた。(図3及び4)判別関数, 判別係数はそれぞれ図3下, 図4下のようになり, そのスコアヒストグラムを描いた。図3については判別は不良であったが, 図4では比較的判別良好であり, 重なりが少ない3峰性のヒストグラムが得られた。

(D) マハラノビスの距離による比較

3段階の比較それぞれについて群重心間距離をあらわすマハラノビスの距離を求めたところ, 図5のようになった。弘前・横浜間はきわめて近く, 横浜・バンコク間はやや近く, 横浜・ハノーバー間はやや遠く, さらに, バンコク・ハノーバー間はきわめて遠くなった。

表 3 回答結果と平均値,

	N	① 母への暴力				② 父への暴力				③ 同	
		いいえ	ときどき	はい	平均値・標準偏差 t 検定	いいえ	ときどき	はい	平均値・標準偏差 t 検定	いいえ	ときどき
横浜	111	90	18	3	0.21±0.47	99	8	4	0.14±0.44	50	45
(%)		81	16	2.7		89	7.2	3.6		45	40
弘前	100	90	7	3	0.13±0.41	91	9	0	0.09±0.28	50	37
		90	7	3		91	9	0		50	37
横浜	111	90	18	3	0.21±0.47	99	8	4	0.14±0.44	50	45
(%)		81	16	2.7		89	7.2	3.6		45	40
ハノーバー	74	65	8	1	0.13±0.38	70	4	0	0.05±0.22	47	18
		87	10	1.3		94	5.4	0		63	24
バンコク	77	76	1	0	0.01±0.11	77	0	0	0	23	48
		98	1.2	0		100	0	0		29	62
回教校	96	95	1	0	0.01±0.10	96	0	0	0	59	37
(%)		98	1.0	0		100	0	0		61	38
キリスト教徒	74	74	0	0	0	74	0	0	0	30	44
		100	0	0		100	0	0		40	59
仏教校	109	103	5	1	0.06±0.28	101	7	1	0.08±0.30	31	77
		94	4.5	0.9		92	6.4	0.9		28	70
		⑥ 学校無力感				⑦ 不登校準備性				⑧ 社	
横浜	111	43	51	17	0.76±0.70	70	30	11	0.46±0.67	64	32
(%)		38	45	15		63	27	9.9		57	28
弘前	100	43	41	16	0.73±0.72	63	26	11	0.48±0.68	65	24
		43	41	16		63	26	11		65	24
横浜	111	43	51	17	0.76±0.70	70	30	11	0.46±0.67	64	32
(%)		38	45	15		63	27	9.9		57	28
ハノーバー	74	25	44	5	0.72±0.58	40	31	3	0.50±0.57	17	44
		33	59	6.7		54	41	4.0		22	59
バンコク	77	47	26	4	0.44±0.59	68	9	0	0.11±0.32	58	19
		61	33	5.1		88	11	0		75	24
回教校	96	71	25	0	0.26±0.44	85	11	0	0.11±0.32	87	9
(%)		73	26	0		88	11	0		90	9.3
キリスト教徒	74	47	26	1	0.37±0.51	62	11	1	0.17±0.41	58	16
		63	35	1.3		83	14	1.3		78	21
仏教校	109	80	22	7	0.33±0.59	98	7	4	0.13±0.44	88	18
		73	20	6.4		89	6.4	3.6		81	16

またメダンの各群では、回教校・キリスト教校間はやや近く、回教校・仏教校間はやや遠く、仏教校・キリスト教校間は幾分遠くなった。

4. 考 察

以上の結果をまとめると、中学生集団での「暴力」と「不適応」への傾向は、①日本国内では地域差はきわめて小さい、②文明化の進んだ大都市でも、背景となる文化により大きな差を生じる、③同じ地域でも宗教的背景により差を生じる、となろう。

NHK 放送世論研究所の「県民性の調査」¹⁹⁾によれば、各県民ごとに特有の意識構造が存在するという。それを大きく2つに分ければ伝統的な家長制度を色濃く残した伝統的な県民性と、核家族的で個人中心的な現代的な県

民性である。青森県民のそれは前者で、神奈川県民のそれは後者であると考えられる。

しかし、こういった県民性ないしは指向性の違いが指摘されているにもかかわらず、両群の間に有意差は認められず、中学生の意識は、少なくとも「問題行動準備性」といった枠のなかでは、全国的に大きな違いはみられないようである。このことは、現代の高度なマスメディアの発達、全国的に中学生に対して均一な影響を与えている結果であるとも考えられる。

一方、社会文化的背景の異なる大都市間の比較においては、それぞれの特徴が明らかになった。すなわち、横浜とハノーバー、バンコクとを比較した場合、横浜では「身内」への暴力傾向が大きかったが、このことは稲村のいう「依存しながらの攻撃」にあたるも

標準偏差, および t 検定

胞への暴力		④ 他人への暴力				⑤ 先生への暴力			
はい	平均値・標準偏差 t 検定	いいえ	ときどき	はい	平均値・標準偏差 t 検定	いいえ	ときどき	はい	平均値・標準偏差 t 検定
16	0.69±0.71	74	30	7	0.39±0.60	102	4	5	0.12±0.45
14		66	27	6.3		91	3.6	4.5	
13	0.63±0.70	72	24	4	0.32±0.54	96	2	2	0.06±0.31
13		72	24	4		96	2	2	
16	0.69±0.71	74	30	7	0.39±0.60	102	4	5	0.12±0.45
14		66	27	6.3		91	3.6	4.5	
9	0.48±0.70	35	35	4	0.58±0.59	68	5	1	0.09±0.33
12		47	47	5.4		91	6.7	1.3	
6	0.78±0.58	31	39	7	0.68±0.63	76	1	0	0.01±0.11
7.7		40	50	9.0		98	1.2	0	
0	0.38±0.49	70	25	1	0.28±0.47	95	1	0	0.01±0.10
0		72	26	1.0		98	1.0	0	
0	0.59±0.49	39	33	2	0.50±0.55	67	7	0	0.09±0.29
0		52	44	2.7		90	9.4	0	
1	0.72±0.46	68	39	2	0.39±0.52	96	13	0	0.11±0.32
0.9		62	35	1.8		88	11	0	
会不適応感		⑨ 自殺念慮				⑩ 家出遂行			
15	0.55±0.72	95	0	16	0.28±0.70	98	0	13	0.23±0.64
13		85	0	14		88	0	11	
11	0.46±0.68	84	0	16	0.32±0.56	91	0	9	0.18±0.68
11		84	0	16		91	0	9	
15	0.55±0.72	95	0	16	0.28±0.70	98	0	13	0.23±0.64
13		85	0	14		88	0	11	
13	0.94±0.63	72	0	2	0.05±0.32	64	0	10	0.28±0.69
17		97	0	2.7		86	0	13	
0	0.24±0.43	67	0	10	0.27±0.49	74	0	3	0.07±0.31
0		87	0	12		96	0	3.8	
0	0.09±0.29	84	0	12	0.25±0.45	92	0	4	0.07±0.26
0		87	0	12		95	0	4.1	
0	0.21±0.41	69	0	5	0.12±0.32	68	0	6	0.14±0.42
0		93	0	6.7		91	0	8.1	
3	0.22±0.47	89	0	20	0.34±0.56	104	0	5	0.08±0.30
2.7		81	0	18		95	0	4.5	

* ; p<0.05 ** ; p<0.01

のと考えられる。つまり、保護されたなかでの「甘え」による自己表現といったおもむきが強い。またこのことは日本の家庭が、外に対しては問題を起こしにくい、内部に問題を抱えやすい構造であることを示唆している。

これに対して、ハノーバーおよびバンコクでは〈④他人への暴力〉が有意に多い。つまり「外敵との対立」という外向的、対外的な暴力行使の傾向が高かったわけである。このことは、西ドイツでの犯罪者少年に占める粗暴犯の割合が、日本のその4、5倍であるという結果と符合するものであろう。

バンコクでは「父親」、「先生」といった父性的権威に対する暴力はほとんどなかった。かつて、日本では、目上の人物への暴力はタブーであり、それが家長主義的な家族のあり

方に関係していた。¹⁴⁾バンコクには現在でも、これに類似した家族の関係があることをうかがわせる結果であった。

「不適応」についての横浜・ハノーバー・バンコク3都市での項目スコアの違いは文化的、宗教的背景の相異を示すものであろう。横浜とハノーバーで「不適応」傾向は一般に高い。ハノーバーでは〈⑧社会不適応感〉がきわめて高いのにかかわらず、〈⑨自殺念慮〉が低い。これはキリスト教を背景とする文化においては、自殺は反宗教的であるとされてお¹⁵⁾り、その宗教的規範が生徒に意識されているのであろう。ただし、実際の青少年の自殺遂行率となると、北村らの西独青年における報告のように、かならずしも低率であるとはいえない。より深刻な事態にいたったときには、宗教的規範は自殺遂行の抑止力となりえ

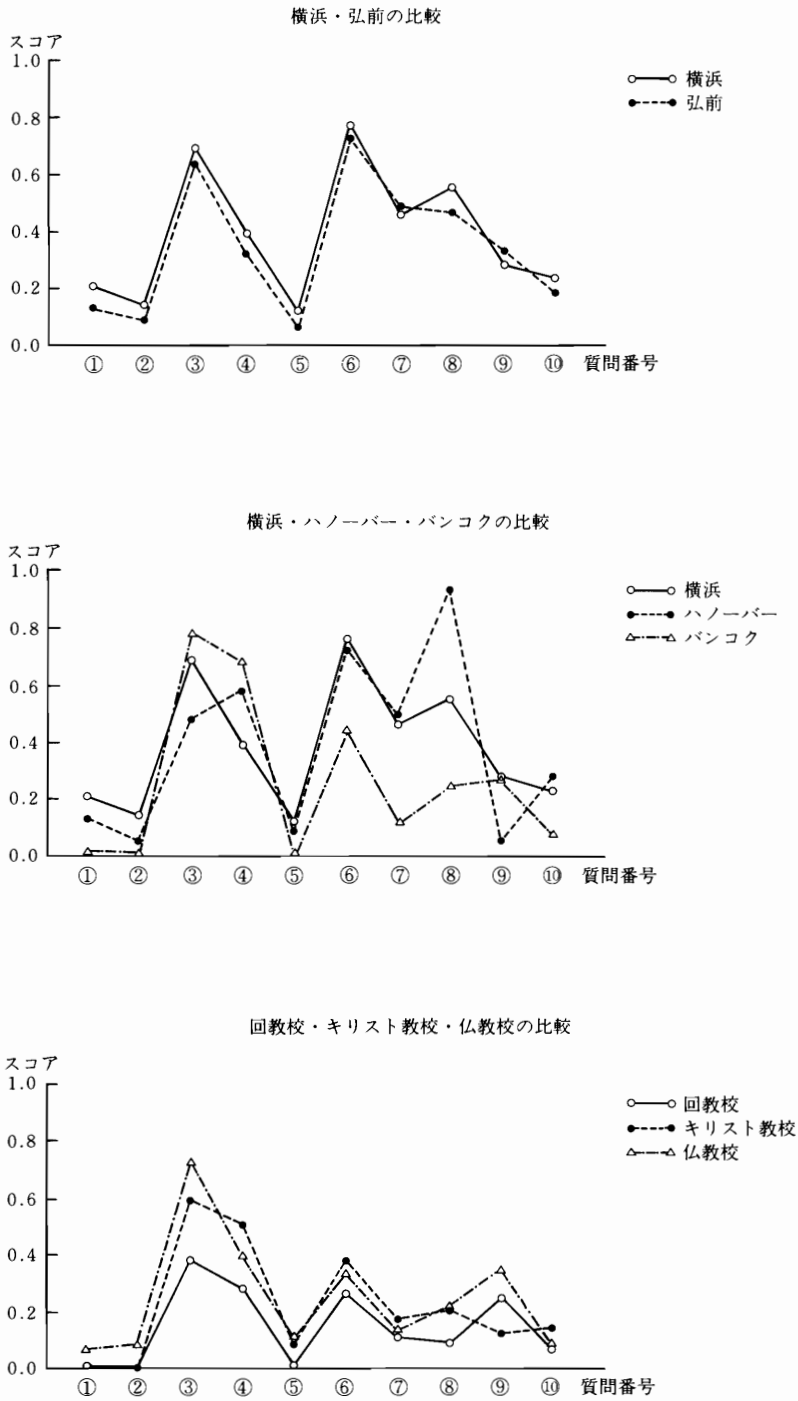


図1 回答結果の比較.

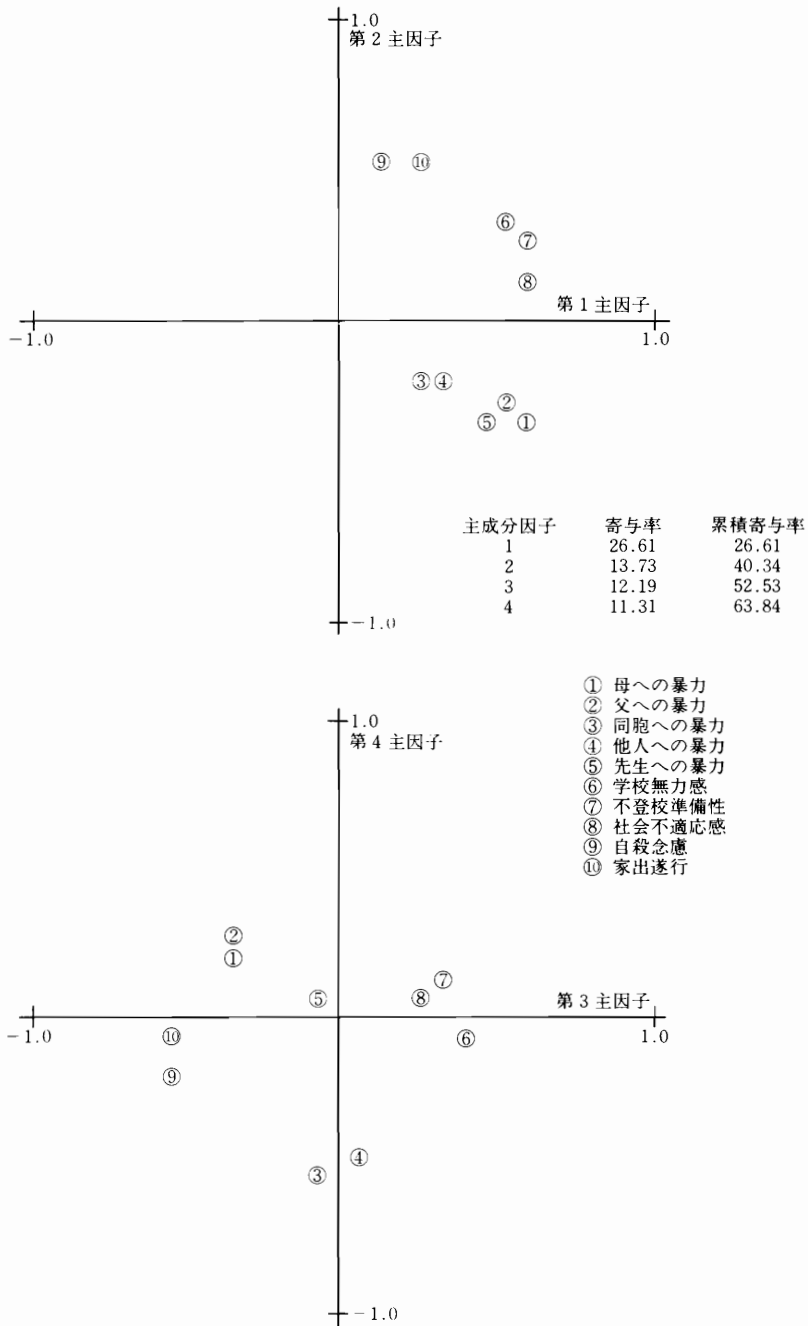


図 2 主成分の二次元プロット (全集団).

表 4 主成分分析の結果

(横浜・ハノーバー・バンコク)		
主成分因子	寄与率	累積寄与率
1	28.30	28.30
2	14.18	42.49
3	12.19	54.68
4	11.10	65.78
(回教校・キリスト教校・仏教校)		
主成分因子	寄与率	累積寄与率
1	23.61	23.61
2	12.95	36.56
3	11.48	48.04
4	10.02	58.06

ないということであろう。

バンコクでは〈⑨自殺念慮〉以外の項目では「不適応」全般で低値をとり、「暴力」でも全般に低値である。タイでは13歳齢における就学率は35%程度¹⁷⁾であり、首都バンコクといえども、就学率は他の先進国と較べ低いと推

定される。そのためバンコクでは「学校にゆき勉強をする」ということが、各家庭の状況によって選択された結果であり、そのため必然的に〈⑦不登校準備性〉について低値を示したものであろう。

インドネシア・メダンの3校の調査結果は同一地域における問題も、その生徒の背後にある母集団の違いによって、大きく事情が異なってくることを明らかにした。メダンは人口約150万人のインドネシア第4の都市である。近代都市としての形成期にオランダ系、インド系、インドシナ系、中国系といった民族の複雑な流入をみた。そのため現在もそれぞれの民族は、かれらの宗教や伝統をかたくなに護り、人種間の垣根をとり払おうとしない。¹⁹⁾ここでは中学生の約70%は回教校に通

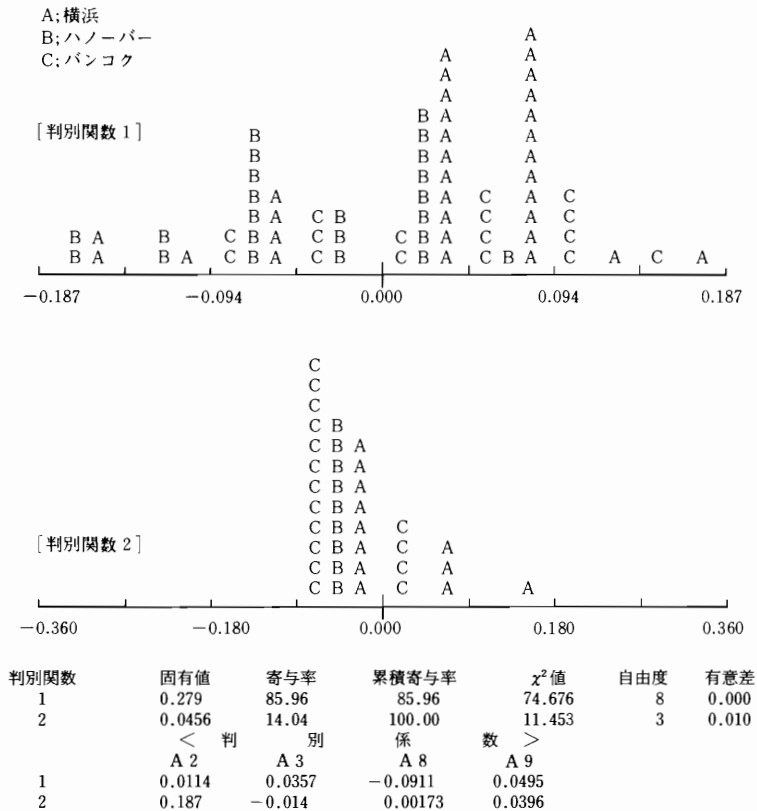
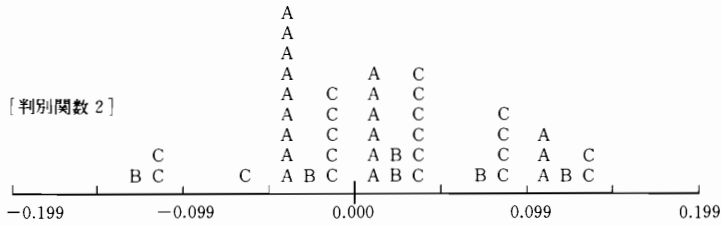
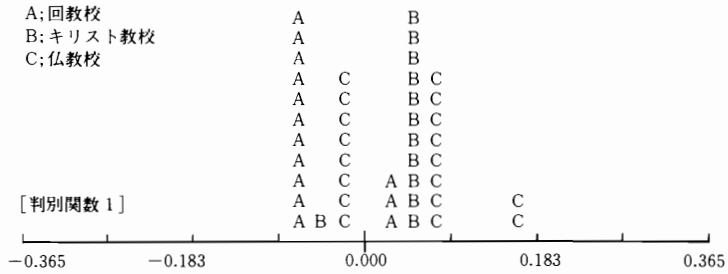


図 3 判別関数とスコアヒストグラム (横浜・ハノーバー・バンコク)。



判別関数	固有値	寄与率	累積寄与率	χ^2 値	自由度	有意差
1	0.1382	75.20	75.20	47.77	8	0.000
2	0.0455	24.80	100.00	12.23	3	0.007
	< 判 別 係 数 >					
	A 2	A 3	A 8	A 9		
1	0.147	0.0926	0.0255	0.0423		
2	0.145	-0.0518	-0.0736	0.0910		

図 4 判別関数とスコアヒストグラム (回教校・キリスト教校・仏教校).

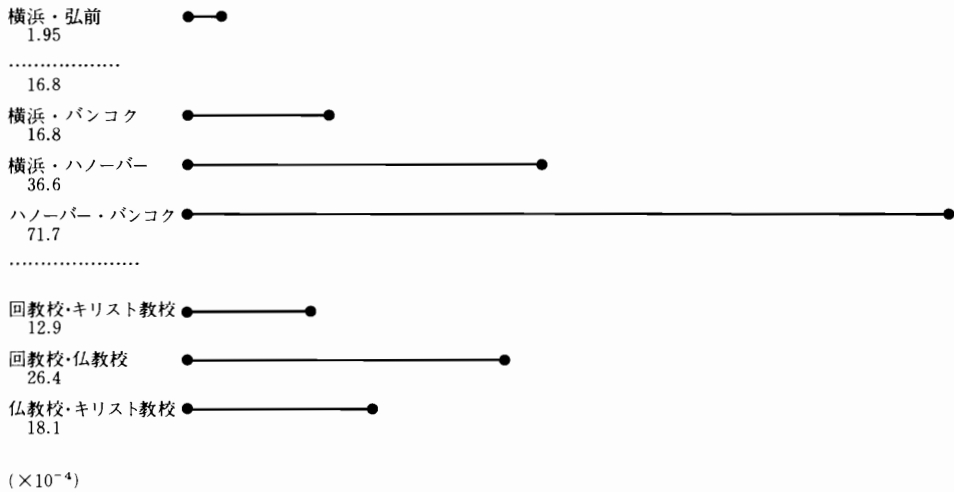


図 5 マハラノビスによる比較.

い、約20%がキリスト教校、約10%が仏教校に通っている。

回教校での「暴力」は、両親や先生に対して皆無である。キリスト教校では〈④他人への暴力〉が多く、仏教校では〈④他人への暴力〉以外の項目全般で暴力傾向が高い。これらの理由として、それぞれの宗教的戒律の違いが、その差異をもたらしているとも考えられる。目上の人物の敬い方、一般的暴力行為の禁止、対人関係が困難になったときの解決方法などで対応の仕方が異なり、そのことが生徒の行動や考えの抑制因となっているとみられる。しかし、これら3群では父の職業に相異があった(表1)ことにも注目しなければならない。つまり、経済社会的状況がこれらの結果に何らかの作用をもたらしているという可能性も、否定できないように思われる。

ところで、「不適応」については回教校で全般に低いが、これは宗教の問題というよりむしろ社会的な問題であるとする見方のほうが妥当であろう。すなわち、インドネシアでは回教がもっとも優勢な宗教であり、全国的には95%以上の信者を抱えている。その多数派である回教校で、学校や社会に対する不適応感が少ないのは当然かもしれない。キリスト教校で〈⑨自殺念慮〉が少なかったのは、ハノーバーでも同様の結果であったことと重ねて考えるならば宗教的抑止力によるものであると考えることができよう。

さらに全集団の主成分分析より、質問項目はほぼ4つに分類できることがわかった。その4つの代表項目を用いておこなった判別分析によれば、メダンの3校の判別は比較的良好であった。このことは、この3校での「暴力」と「不適応」のあり方全体の構造が、それぞれ質的に異なるものであることを示唆している。

以上に述べた成績は、マハラノビスの距離により求めた群間重心距離によって明確に示される。つまり、生徒の「暴力」や「不適応」の問題に関して、日本国内での違いは僅少で

あること、同規模の大都市のなかでも、その背景となる社会や文化により大きな相違があること、さらに同地域でも生徒の生活する社会文化ならびに宗教的背景により、質的内容に違いがあることが明らかとなった。

すなわち、中学校生徒の「問題行動準備性」の形成において、「現代化」や「都市化」による影響が世界共通の問題と考えられてきたが、それらの影響もさることながら、それぞれの社会文化や宗教的背景の違いが、より多く影響を与え、それぞれ異なった「問題行動準備性」を生み出すに至るものと思われた。

5. ま と め

4カ国(日本、西ドイツ、タイ、インドネシア)、5地点、7群の中学生集団について「暴力」と「不適応」の比較研究を行ったところ次のことが明らかとなった。

1) 日本国内では、「暴力」と「不適応」について、大都市も地方も大きな違いはみられなかった。

2) 日本では、外国に比較して身内への暴力が多く、依存しながらの攻撃(稲村ら)の傾向がみられた。

3) 横浜・ハノーバー・バンコクの比較ではそれぞれに有意な差がみられたが、その程度はハノーバー・バンコク間、横浜・ハノーバー間、横浜・バンコク間の順で大きかった。

4) 回教校・キリスト教校・仏教校(インドネシア・メダン)の比較では、それぞれに有意な差がみられたが、さらに判別分析により、その「暴力」と「不適応」の構造全体の相異が示唆された。

(本研究は、弘前てんかん研究所の助成によって行われた。結果の一部は第6回日本社会精神医学会において発表した。

本研究にあたって、多くの方々から御援助を戴いたことを記し、これらの方々へ心よりお礼申し上げます。)

文 献

- 1) 伊藤克彦：子どもにあたる都市生活環境の影響。精神科MOOK, 14: 73-81, 金原出版, 東

- 京, 1986.
- 2) 小田 晋: 少年非行の比較精神医学. 臨床精神医学, **11**: 929-935, 1982.
 - 3) MACHLEIDT, B. *et al.*: Eindruck aus der Psychiatrie im Land des Lacherns. Sozialpsychiatrische Informationen, **11**: 130-143, 1986.
 - 4) 瓜生 武: 最近の少年非行と父性の問題. 精神療法, **9**: 137-142, 1983.
 - 5) 岩井寛: SI 両親イメージテストによる家族病理の解析. 精神療法, **10**: 352-363, 1984.
 - 6) 家庭裁判所現代非行問題研究会編著: 日本の少年非行. 大成出版社, 東京, 1979.
 - 7) 檜山四郎: 少年暴力の背景と予防. ぎょうせい, 東京, 1981.
 - 8) 安藤延男: タイ国学生の価値観に関する心理学的比較文化的研究. 九州大比較教育文化施設紀要, **20**: 51-62, 1970.
 - 9) 林知己夫, 他: 情報処理と統計数理. 産業図書出版, 東京, 1970.
 - 10) NHK 世論調査部編: 県民性の調査. 日本放送出版協会, 東京, 1985.
 - 11) 菱山洋子, 他: 学校嫌いの統計研究(2)—全国における出現率の推移と社会的要因. 児精医誌, **23**: 223-234, 1982.
 - 12) 池田由子, 他: 児童精神衛生における最近の問題について. 社会精神医学, **1**: 125-132, 1978.
 - 13) 稲村 博: 攻撃性の精神病理. 臨床精神医学, **10**: 1055-1060, 1981.
 - 14) 岩井 寛: 家庭内暴力と家族病理. 精神療法, **6**: 217-225, 1980.
 - 15) ALVAREZ, A.: The savage God—A study of suicide. Weidenfeld and Nicolson, London, 1971.
 - 16) 北村陽英: 青少年自殺企図の日独比較研究. 精神経誌, **85**: 54-68, 1983.
 - 17) 松本重治: 東南アジアハンドブック. 講談社, 東京, 1977.
 - 18) 東京書籍編: 世界各国要覧, 4 訂版. 東京書籍, 東京, 1988.
 - 19) 坂井 隆: スマトラ, オリエンテーション, スーパーガイド アジア, インドネシア. 90-108, JICC 出版局, 1986.
 - 20) KUA EE HOOK, *et al.*: Suicide in the island of Singapore. Acta Psychiatr. Scand., **71**: 227-229, 1985.